九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

インフォメーション・エコノミー : 情報化する経済社会の全体像

篠﨑, 彰彦
九州大学大学院経済学研究院：教授

https://hdl.handle.net/2324/4488770

出版情報：pp.1-279, 2014-03. NTT出版
バージョン：
権利関係：

はじめに

経営史が専門のチャンドラーは、１９９０年代を「工業の時代」から「情報の時代」への転換期と位置付けた。彼は、当初この転換を「第３次産業革命」ととらえていたが、後にそれが適切ではないと考えるに至った。なぜなら、18世紀末から19世紀にかけてイギリスでみられた工業の時代への転換を第１次産業革命、そして同じ工業化の枠内で19世紀末から20世紀にかけて起きた転換が第２次産業革命なのであり、20世紀末に起きた情報の時代への転換は、工業化の枠を越えたさらに大きな変化だと認識するようになったからである（Chandler［2000］）。

この「情報革命」の波は21世紀に入ってからも衰えることなく、むしろ勢力を増してグローバルに及んでいる。産業革命後の世界史を振り返ると、数々の新技術は一定の教育水準とそれを可能にする所得水準がなければ、実社会への普及と定着に限界があり、この限界がさらに発展を阻む「貧困の罠」は長年人類の課題であり続けた。だがＩＴ（情報技術）は、モバイル・テクノロジーを中心に、かつて人類が経験したことのない大変化を引き起こしている。

アフリカでは、かつて数十キロ離れた地域に通っていた農業指導員が、ＳＭＳ（ショート・メッセージ・サービス）を通じて栽培時期や気象情報を伝えることで指導エリアを格段に広げている。携帯電話で市場価格を知り得る農民は、仲買人の言い値で買いたたかれることがなくなり、船上で有利な

値がつく寄港先を確認できる漁師は、所得を大幅に増やした。携帯電話による小口送金は、最低預金額や口座管理料が壁となって銀行口座を持てなかった人々に多くの恩恵をもたらしたばかりか、国際機関による難民への食糧支援にも応用されている。

これらは、狭い意味の技術的、工学的なイノベーションではない。一貫した技術革新の継続による劇的な価格低下と、それによってもたらされる圧倒的な利活用のすそ野拡大が、新ビジネスを次々と勃興させながら、経済活動の基盤にある仕組みそのものを激しく揺さぶる革命に他ならない。農業革命によって狩猟・採取生活から農耕・定住を基盤とした生活が生まれ、産業革命による工業化が生産と消費の仕組みを劇的に変えたように、現在進行中の「情報革命」は、これまで新技術とは縁遠かった途上国の漁師や農民さえも巻き込んで、世界を大きく変貌させているのである。

「情報革命」の渦中にあって、その全貌をとらえることは至難の業であろう。次々とわき起こる新現象をアドホックに追い求めるだけでは、表面的な動きにふりまわされて右往左往するだけになりかねない。むしろ、こうした大変化の時代には、経済活動の基盤にある仕組みの本質をもう一度原点に立ち返ってとらえ直す方が、回り道のようでありながら、実は効果的だと思われる。先人たちの深い洞察と思索を頼りにぶれない軸を見出せば、現象だけをみて消化不良でめまいがしそうな状態から解放され、表面的には不規則にみえる様々な出来事を、筋道を立てて観察し、余裕をもって考えることができるだろう。

本書では、筆者が大学の学部生と大学院生向けに行っている情報経済関連の講義のうち、基礎的

な理論や考え方にかかわる部分を一般の読者にも理解しやすいように、具体的な事例や簡単な数値例をあげながら解説した。構想は約10年前、資料は約5年前に調っていたが、完成までに思いがけず時間を要した。

この間、SBクリエイティブ株式会社の松尾慎司氏からは、「ビジネス＋IT」の連載を通じて本書で取り上げた内容に関する最新の業界事情と貴重な助言を頂戴した。西日本電信電話株式会社、株式会社NTTドコモ、株式会社KDDI総研からは、九州大学経済学研究院研究・教育奨学寄附金により、情報経済に関係する教育と研究へのご支援を賜った。本書で言及した事例の一部には、科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究（課題番号24650126）の成果も活かされている。また、総務省情報通信白書編集委員会、内閣府経済社会総合研究所、情報通信総合研究所、三菱総合研究所、野村総合研究所、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター、日本経済研究センターなど様々な研究機関やシンクタンクの関係者らと各種の研究会を通じて活発な議論を積み重ねることができた。これらの機会にやり取りした最新動向は実に刺激的であったが、同時に、本書で取り扱ったような原点に立ち返る考察への関心も存外に高いとの印象を深めた。紙幅の都合でお名前をすべて記すことはできないが、これらの方々のご支援とご協力に改めて深く御礼申し上げたい。

最後に、本書の出版に際しては、NTT出版株式会社の神野浩氏、相澤朋美氏に大変お世話になった。とりわけ同社の吉田英樹氏には、本書のねらいと執筆の意図を充分に汲み取っていただき、適切な助言とともに丁寧な対応を頂戴した。大学を取り巻く環境の激変に翻弄される筆者の事情を

斟酌して、臨機応変に段取りを工夫される仕事ぶりに、情報の時代に一層重要となる人間力のありがたさを痛感した。研究を支えてくれた大学院生諸君と健康を気遣ってくれた家族の協力もあわせて、心から感謝の意を表したい。

2014年2月

著者